

「やりたいこと」がわからない人たちへ 鷺田 小彌太

2001年の本だが、書いてあることに古臭さはない。「自分がすすんでやろうとしたことでもないのに、熱中すれば、自分のやりたいことになる。」というのは当たっていると思う。

「やりたいこと」に思いをめぐらすことに、年齢はない。何歳になっても、「これこそやりたいことだった」という発見をしたいものだ。しかし、「やりたいこと」を追おうとすると、どんどん遠のいてゆく。やりたいことを幸運にもつかむことができたとしても、砂のように掌からこぼれ落ちてゆく。じつに、はかなく、頼りない。

・・・しかし、と私は大声で  
いってみたい。「やりたいことがわからない。すばらしいじゃないか」と。エッ、と思う人に向かって本書を書いた。

ところが「やりたいことがわからない」という人の多くには、とりあえずは、いまの人生を充実して生きよう、いまの仕事に懸命になろう、そして、そこから少しでも前進しよう、また自分の引き継いだものをすこしでも発展させていこう、という前向きな心性をみいだすことができないのである。

このいまの「自分」を充実させ、変えることに関心が向かず、ただ自分の人生を、別な場所、別な条件に「ずらす」ことを求めている。だから、実状は、ただ現状に不満をもち、現状に積極的に関わらず、現状にぶら下がりつつ「放棄」する、という生き方に終始するのだ。

やりたいことを見いだすことが人生の目的とならないように

自分と向き合い、心の襞（ひだ）

に分け入り、そこで見えたさまを小説に書いて生きていけたら、どんなにいいだろう。そう考えたのだ。書くのは嫌いではない。少しは経験もある。

しかし、小説を書いて、それで生活していくということはとても不可能だろう。

それから彼は、夜は守衛の仕事をやりながら、時間のあるかぎり物を書くという生活を始める。

・・・

彼はつねに自分と向き合い、自分のやりたいことはなんなのか、を書きながら考える。ところが、妙なことに気がつく。小説を書くこと自体がやりたいことを見つけるための手段になっている、ということだ。

「やりたくない」ことを強制するのが、学校であり、会社だ

結婚は簡単である。しかし、それを持続させること、ましてや成功に導くことは困難だ。たいていはなれ合いになり、そのうちに、離婚するエネルギーもなくなって、影のように寄り添うようになる。もっとも、ここまで持ちこたえることができれば、結婚生活は成功だった、ということもできるだろう。

たいていの人は、やりたいことが見つからないというのに、見つける努力をほとんどしない。だから、「まあこんなもんだろう」と、目の前にある適当な職業・仕事を選んで終わる。あるいは、見つける努力をするにはするが、中途半端も手伝って、見つからず、ありあわせのメニューのなかから仕方なく一つを選ぶ。こんなのは見るからにつまらなさそうだろう。ところがである。

別にやりたくないことでも、続けていく。ただし、熱心にだ。好きでもないことに熱中できるか、とってはいけない。熱中すると、熱中するから、好きになる、というのが実際なのだ。

押しつけられた仕事でも、熱心に励みさえすれば、だんだん自分にじっくりしてくる。ああ、これが自分の生きる糧だったんだ。目的だったのだ。こういうことを自分はやりたかったんだ。こう気づくようになるから不思議だ。熱心さを欠くと、自分のやっていることに不満、不足しかわかない、というのは本当だ。

自分がすすんでやろうとしたことでもないのに、熱中すれば、自分のやりたいことになる。

最初はだれでも欠点に気がつかないものだ

やりたいことをやる。最初の数年は楽しくてたまらないものだ。いや、正確にいうと、ほんの数カ月間は楽しくてたまらない。やりたいことをはじめたのだ。なによりも新鮮だ。辛くたって平気だ。集中し、夢中になれる。

・・・

翻訳に素人が手を

出すと、決まって私のようなになる。先生の手が入らなかったなら、翻訳書を出そうとして、誤訳集を出す羽目になったに違いない。

どんなに好きでやりたいことでも、それが仕事となるとつらくなる。たまらなくなる。これが通則だ。

・・・

趣味で向かっていたときと、仕事として義務でやらなければならない、成果を上げなければならない、世間の評価もえなければならないときとでは、心理

的ストレスの落差はものすごく違うのだ。

**嫌いなことを淡々とやるからプロなのだ**

これも何度も強調したように、**現在を賢明に生きると、過去を振り返る必要がなくなる。**過去の記憶は、記憶として懐かしく残るだけだ。未来に不安を抱く必要はなくなる。未来はまだやってきていないからだ。